

乙 頁

お と ぎ だ

第43号 通巻9巻第2号
1989年3月25日 発行
守山市立埋蔵文化財センター
☎ 0775-85-4397
〒 524-02
守山市服部町2250番地

はじめに

昭和63年度の最終号をお届けします。63年度は市内各地の調査で、数々の成果を得ることができ、中でも益須寺遺跡の前方後方墳はマスコミにも掲載され、全国的に注目を集めました。調査に参加して戴いた方々や関係機関にお礼申し上げますと共に、4月以降もよろしく御指導賜りたく存じます。

さて、今号は1～3月の発掘調査の動向、当センターの話題の他に、昭和63年4月から平成元年3月までの1年間の発掘調査成果をまとめ、振り返ってみることにします。

発掘調査の成果

前号の乙頁で報告してから、新たに吉身西遺跡、伊勢遺跡、川田遺跡で調査を始めました。(調査位置は3ページに図示しています。)前年より継続している二町鏡遺跡とこの3遺跡の調査概要を紹介します。

22 伊勢遺跡の調査

1月13日より2月8日までの期間、伊勢遺跡の発掘調査を実施した。場所は伊勢町字大苗代で、昨年末個人住宅建設に伴い実施した調査地(21)の南側の隣接地にあたる。昨年末の調査成果は、古墳時代初頭の方形周溝墓2基、奈良時代の溝2条、ピットで、検出した2基の方形周溝墓のうち1基と奈良時代の溝が今回の調査地に広がっていた。今回の調査地からはこの方形周溝墓、溝の続きの他に溝1条が新たにみつかった。この溝も奈良時代に掘られたものようである。しかし周溝墓や溝を検出したのは調査地の北辺で、それより南側は、砂層の堆積が約2m下までつき、急激に低地化していた。今は平坦な地形であるが、1700年ほど前は河道が流れていたのだろう。

当地より約100m南方の住宅地でも昭和57年に発掘調査が行われていて、ここからも弥生時代後期の竪穴住居の他に、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されているが、今回検出の方形周溝墓がそこまで広がってひとつの墓域を形成するのではなくこの旧河道によって分離されているようだ。検出した2基の周溝墓からは北陸地方の特徴をもつ供献土器が出土した。一方、57年調査の周溝墓からは在地色の強い土器が出土している。

26 川田遺跡の調査

チッソポリプロ株式会社内で、工場増設に伴って1月末より調査を実施した。調査地の隣接地も昭和61年～62年にかけて、同じく工場の増設に先立って行われており、古墳時代後期の前方後円墳、鎌倉時代の掘立柱建物、合村跡を検出するなど大きな成果をあげている。

本年度調査対象地約3000㎡を分割し、3つの調査トレンチを設定した。東側トレンチでは、約1mの造成土とさらに50cmの耕作土の下から、東西方向を向く幅30cm～70cmの溝を検出した。出土した土器から鎌倉時代の溝であると考えられる。西側トレンチでも地表より約1.7mの深さまで掘り下げて、掘立柱建物と溝を検出した。建物の数、規模はいまのところ分からないが、建物柱穴から出土する黒色土器、土師器から平安時代後期の住居であろう。現在は東西のトレンチに挟まれた中央のトレンチを調査中である。平安時代の建物、鎌倉時代の溝の性格について、もっと知ることが出来る成果が期待できる。

25 二町鏡遺跡の調査

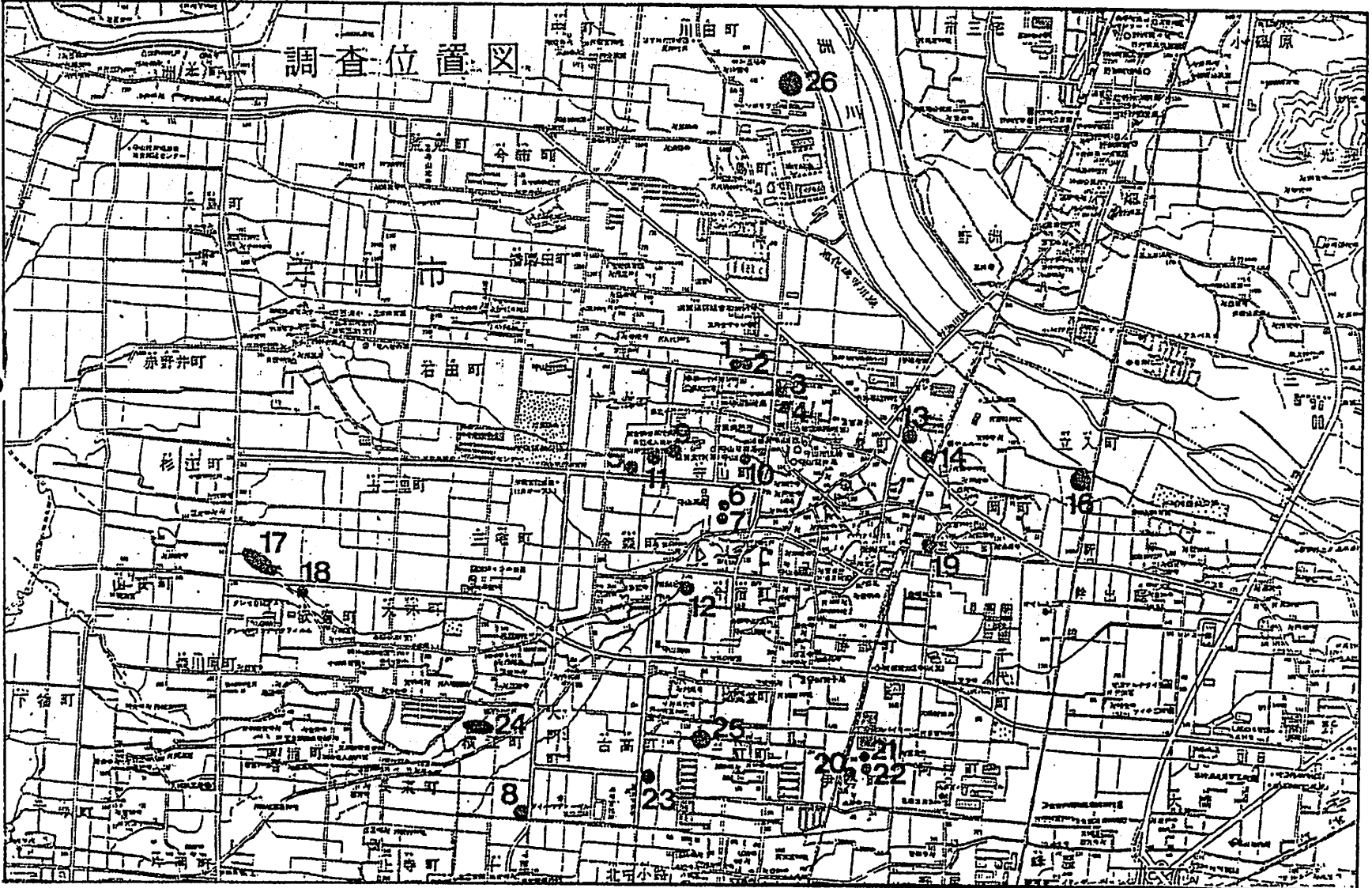
物部小学校建設用地での調査は昨年12月から実施している。縄文時代後期から江戸時代までの遺物が発見されている他、弥生時代中期の方形周溝墓2基以上、古墳時代前期～後期の溝、奈良時代の溝、ピット、平安時代末の集落、江戸～明治時代の井戸跡が幾つかみついている。弥生時代中期の方形周溝墓は供献土器がみられ、連結した状態であることが分かっている。平安時代末期の集落はムラの西南端の一部が把握でき、掘立柱建物2棟、井戸がセットで検出されており、そのうち1棟は母屋と考えられ、4間×5間以上の規模を持ち、内部にカマド、馬屋と考えられる施設をもっているようだ。

11 吉身西遺跡の調査

今回の調査地は、市立図書館と道路を隔てた西側の水田地で、マンション建設に先ち、1月から調査を実施している。現在までに弥生時代後期の竪穴住居と土壌、自然流路、それに古墳時代、平安時代の溝を検出している。

弥生時代の竪穴住居は2棟検出したが、うち1棟は一辺約6mの正方形をしている。床面には屋根を支える柱を埋めた柱穴が4穴と周辺には排水用の小さな溝(周壁溝)が掘られている。また、住居の中央には炉、東辺には物を蓄えておくための穴(貯蔵穴)があった。住居内からは、当時使われていた大量の土器(甕、甕、鉢、高杯)が出土した。おそらく、この住居からよそに移るときにいらなくなった土器を住居に捨てたのだろう。守山の弥生人達の生活を知るうえで、貴重な資料である。

調査位置図



昭和63年度埋蔵文化財調査のまとめ

昭和63年4月から平成元年3月までの期間に実施した埋蔵文化財発掘調査は、下表のとおり15遺跡26件にのぼります。個々の調査成果については、これまで「乙貞」で報告して来ましたが、ここでは遺跡別にとりまとめて紹介したいとおもいます。

昭和63年度実施発掘調査一覧表

位置図番号・遺跡名	調査所在地	調査年月日	調査原因
1 横 枕遺跡 第1地点	守山町字皆鉢	S 63・ 6～ 7	店舗建設
2 " 第2地点	守山町字皆鉢	S 63・ 6～ 7	個人住宅建設
3 " 第3地点	守山町字南百ヶ町	S 63・ 4	マンション建設
4 " 第4地点	守山町字南百ヶ町	S 63・12	個人住宅建設
5 金森東遺跡 第1地点	守山町字七ツ枝	S 63・ 4～ 6	資材置き場建設
6 " 第2地点	守山町字七反ヶ町	S 63・ 6～ 7	個人住宅建設
7 " 第3地点	"	"	"
8 下 長遺跡	大門町字ヒサゲ	S 63・ 5	倉庫建設
9 吉身西遺跡 第1地点	守山町字下目田	S 63・ 5～ 8	図書館増設
10 " 第2地点	守山町字南高田	S 63・ 9	個人住宅建設
11 " 第3地点	守山町字仁王ヶ町	H 1・ 1～ 3	マンション建設
12 経 田遺跡	今宿町字高田他	S 63・ 6～ 8	宅地造成
13 益須寺遺跡 第1地点	吉身町字島田	S 63・ 8	倉庫建設
14 " 第2地点	吉身町字アゴ子	S 63・ 8～12	マンション建設
15 " 第3地点	吉身町字泉海道	S 63・11	店舗建設
16 荒 牧遺跡	立入町字荒牧他	S 63・ 8～12	砂利採取
17 杉江東遺跡	欲賀町地先	S 63・ 9～12	守山川改修工事
18 大 宮遺跡	"	"	"
19 吉身南遺跡	浮気町字中ノ町	S 63・ 9～10	マンション建設
20 伊 勢遺跡 第1地点	伊勢町字伊勢里	S 63・12	個人住宅建設
21 " 第2地点	伊勢町字大苗代	S 63・12	"
22 " 第3地点	"	H 1・ 1～ 2	宅地造成
23 塚之越遺跡	古高町字南塚越	S 63・11～12	個人住宅建設
24 横 江遺跡	横江町字柿カシ他	S 63・11～12	雨水幹線工事
25 二町鏡遺跡	二町町字鏡他	S 63・12～H 1・ 3	小学校建設
26 川 田遺跡	川田町字南山中他	H 1・ 1～ 3	工場建設

※ 2・4・6・10・20・21・23は国庫補助事業対象調査

横枕遺跡 (1~4)

守山町に所在する横枕遺跡では、第1地点(1)~第4地点(4)で調査を実施し、いずれも弥生時代中期末の集落跡がみつかった。第1、2地点では円形1棟、方形3棟の竪穴住居を、また第3地点では、円形3棟、方形1棟の竪穴住居と方形周溝墓1基、大溝、土壌を検出した。この大溝は環濠と呼ばれるムラを巡る濠であろう。

第4地点は、円形1棟、方形4棟の竪穴住居、土壌がみつかった昭和62年度実施調査地の隣地で、今回は土壌、溝がみつかった。

これまでの発掘調査から、竪穴住居には円形と方形が混在し、ちょうど円形住居から方形住居へ移行する時期にあたり、石器が出土していないことから鉄器が普及していることがうかがわれる。

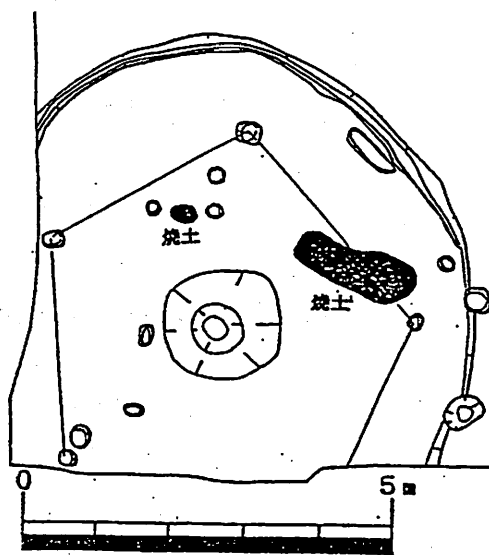
横枕遺跡の分布範囲はすでに宅地化されている為、小規模な調査が多く、遺跡の全体像を把握できるまで時間がかかるが、今年度の調査で、径400mを越える環濠集落であることがわかった。

金森東遺跡 (5~7)

金森東遺跡でも、3件〔第1地点(5)、第2地点(6)、第3地点(7)〕の調査を実施した。第1地点からは弥生時代中期~後期の方形周溝墓6基と平安時代の溝などがみつかった。調査地南側の山柿団地でも昭和58~59年度に調査が行われ、弥生時代中期~後期の方形周溝墓、古墳時代後期の古墳、あわせて37基がみつかっており、弥生時代の中期から後期の時期、この一帯は広大な墓域になっていたようだ。

第2・3地点は、守山高校南側の宅地の一画で、弥生時代後期~古墳時代中期の竪穴住居5棟を検出した。周りの宅地でも昭和59年度に調査が行われ、弥生時代後期~古墳時代後期の竪穴住居48棟、掘立柱建物12棟を検出しており、長期間にわたった集落であることがわかった。

弥生時代の住居は全容を見ることができなかつたが、平面形状と支柱穴の位置が円形住居と異り、伊勢遺跡、吉身西遺跡などで7棟確認されている五角形住居と考えられる。五角形住居は集落内の有力者が住んだ家であろうか。



【第2・3地点五角形住居平面図】

下長遺跡(8)

下長遺跡の調査では、古墳時代前期～中期の土壙群を検出した。大小十数基の土壙からは甕、壺、鉢、高杯が出土した。下長遺跡は、昭和58年に当地より北東方約300mの地点で調査していて、古墳時代の掘立柱建物、溝、土壙を検出した。溝や土壙から土器のほかに、ミニ銅鏡2点、竪杵、銅製木製品が出土しているため、祭祀がとりおこなわれた場所ではないかと考えられている。

当遺跡では近く発掘調査が実施されるため、やがて遺跡の実態は解明されるであろう。



【土壙群出土土器】 十数基のうちの2基から出土した土器。甕、壺、鉢、高杯がみられる。いずれも土壙に埋納された後にわれたようで、復元するとほぼ完形になる。

吉身西遺跡(9～11)

県立成人病センターを中心にした一帯には吉身西遺跡が所在する。この遺跡の東半では弥生時代中期の方形周溝墓群が、そして西半では弥生時代から古墳時代にかけての集落、墓域が検出されている。

西半に位置する第1地点(9)では、弥生時代後期と考えられる竪穴住居2棟、古墳時代後期の掘立柱建物、古墳跡、溝などがみつかった。昭和59年度に目田川改修工事に先立って隣接地が調査されているが、この広がり確認されている。第1地点のすぐ西側の第3地点(11)からは溝、竪穴住居、旧河道を検出し、遺構に伴い、弥生土器や古墳時代前期の土師器が多く出土している。第1地点に比べ、やや遺構密度が低くなっているが、弥生時代後期の集落の一部をなしている。

東半の第2地点(10)では、弥生時代中期の方形周溝墓2基を検出した。当地一帯の区画整理事業に先立って実施した調査によって27基の方形周溝墓が検出されていて、この2基も部分的に検出している。周溝墓溝内からは弥生時代中期後葉の供献土器が出土した。

経田遺跡 (12)

宅地造成工事に先立つ調査を6～8月に実施し、縄文時代の土壌、弥生時代後期の竪穴住居2棟、溝、古墳時代後期の方墳3基、大小の溝、そしてそれ以降の掘立柱建物3棟を検出した。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器など土器のほかに、縄文時代の石斧、石鏃や弥生時代後期の銅鏃、古墳時代後期のガラス小玉、勾玉が出土した。

今回の調査地北側の宅地も昭和61年度に調査を実施していて、今回検出した弥生時代～古墳時代の遺構については予想していたが、縄文時代にさかのぼる遺構、遺物の発見は、新たな調査成果である。



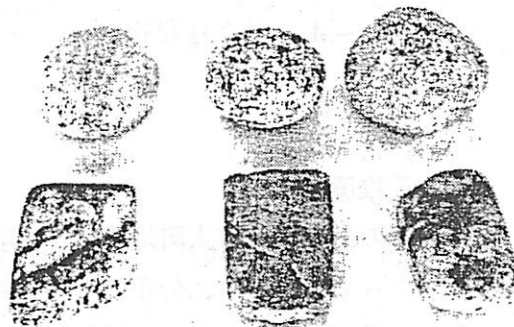
【縄文時代の石器】 下段は磨製の石斧
この他にも、石鏃など多く出土する。↓
【古墳時代の土師器・須恵器】 これら
の土器は、調査地を縦断する溝より出土
した。土師器の甕、須恵器の杯、蓋、壺、
提瓶などがみられる。←

益須寺遺跡 (13～15)

栗東・大津線跨線橋近辺で、2件
〔第1地点(13)、第2地点(14)、第
3地点(15)〕の調査を実施した。こ
の一带は頻繁に開発されるため、毎
年数次の発掘調査が行われている。

第1地点では古墳時代後期の竪穴
住居1棟と奈良時代の溝3条がみつかった。

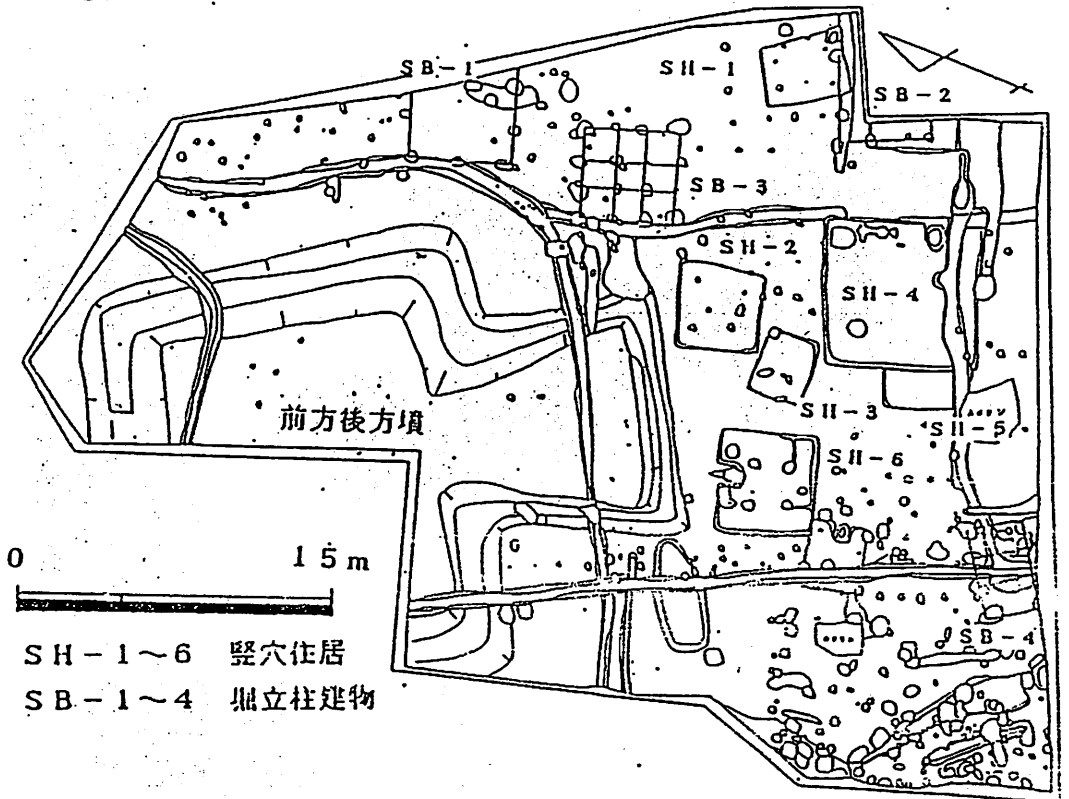
第2地点では古墳時代前期の前方後方墳がみつきり、話題を呼んだ。県内6例目
の発見であるこの古墳は全長約23.7m、後方部幅14m、前方部長13.4m、前方部幅
9m、前方部長10.3mの規模である。周溝内でみつかった甕や高杯から、この古墳
の年代は3世紀後半頃と推定でき、弥生時代から古墳時代への墓制の変遷を知るう



えて重要な資料である。古墳の他にも、6世紀代（古墳時代後期）の竪穴住居7棟、土塋2基、溝3条、7世紀後半～8世紀（奈良時代）の掘立柱建物4棟、竪穴住居1棟、土塋、溝もみつかっている。第1地点の調査成果とも考え合わせると、この一帯にも古墳時代の集落が営まれていたことがわかった。

出土遺物は土師器、須恵器や滑石製玉製品、そして「和同開珎」5枚、瓦などがみつかっている。瓦は遺跡の名称にもなっている「益須寺」に使われたものであろうか。

【第2地点検出遺構平面図】



あらまし
荒牧遺跡 (16)

守山市の東南辺、立入町地先に、古墳時代以降の集落跡が眠っていることが確認調査によって発見され、分布の中心と考えられる地域の小字名から荒牧遺跡と命名された。発掘調査は8月～11月に実施した。今回の調査では、古墳時代の竪穴住居2棟、古墳（方墳）2基と室町時代以降の溝がみつかった。調査地は野洲川から僅か20mほどしか離れていないが、氾濫などの水害の痕跡はなく、安定した土地であったと想像できる。

今回の調査だけで、この遺跡を語ることはできないが、古墳時代、室町時代以降の集落が広がるようだ。

すぎえひかし おみすや
杉江東・大宮遺跡 (17、18)

守山川改修工事に係る関連遺跡の調査は、過去昭和61、62年に杉江東遺跡の調査を実施していて、今回が3年次目にあたる。63年度は61年度杉江東遺跡調査地の東側（通水部分の東半分）と欲賀町地先の大宮遺跡の2カ所を調査した。杉江東遺跡では61年度調査で検出した旧河道の続きがみつき、そこから土師器、須恵器、黒色土器が出土した。現在も山賀川が琵琶湖に注ぐように、古くから河道がこの地域を流れていたのだろう。一方、大宮遺跡では、堆積作用が大きかったようで、耕作土下約1m粘質土があらわれ、以下に砂層、砂利層が深く堆積していた。砂層・砂利層からは土師器、須恵器、黒色土器や墨書土器、曲物、木器が多数出土した。大宮遺跡は、今回が初めての調査であり、その実態についてはあまり知られていないが、今後も改修工事に伴う調査が実施されるため、次第に明らかにされることであろう。

よしヌスケス
吉身南遺跡 (19)

マンション建設に先立ち、守山駅東口近くの駐車場を調査した。当地北側のつがやま荘の建設に際して行った調査では、古墳時代後期の竪穴住居16棟がみついている。駅東口周辺が昭和40年代になって再開発されたことにもよるが、調査例は多く、つがやま荘より駅側の調査では、例外なく古墳時代後期の竪穴住居や集落に関連する遺構を検出している。守山駅をこえた吉身北遺跡とあわせた大集落の存在が認められた。

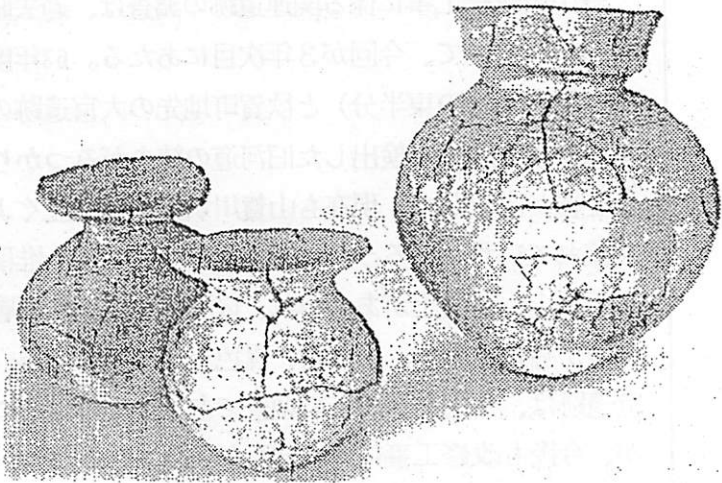
検出した遺構はピット3穴と土壇2基で、出土遺物から古墳時代後期の遺構であることがわかる。調査地は、再開発前に操業していた煉瓦工場が行った粘土採取のため、大半が攪乱され、既に地山が失われていた部分も多かった。

伊勢遺跡 (20、21、22)

伊勢町集落北端の水田地3箇所〔第1地点(20)、第2地点(21)、第3地点(22)〕を発掘調査した。いずれもJR琵琶湖線の東南沿いにあたる。第1地点では、鎌倉時代の溝、土壇を検出した。西方約20mの距離にある住宅の建築前の調査で同時期の掘立柱建物2棟、井戸1基がみついているため、その広がりであると考えられる。

第2、第3地点は1区画の水田地で、ここからは方形周溝墓2基、掘立柱建物1棟、溝3条、ピットを検出した。2基の方形周溝墓からは北陸地方の特徴をもつ土器が出土していて、古墳時代初頭の時期が考えられる。周溝墓と重なっている溝は奈良時代に掘られたのであろう。これらの遺構は、主に第2地点の方でみつき、第3地点は南側に向かって急激に低地化し、調査地南端では、遺構検出面との比高

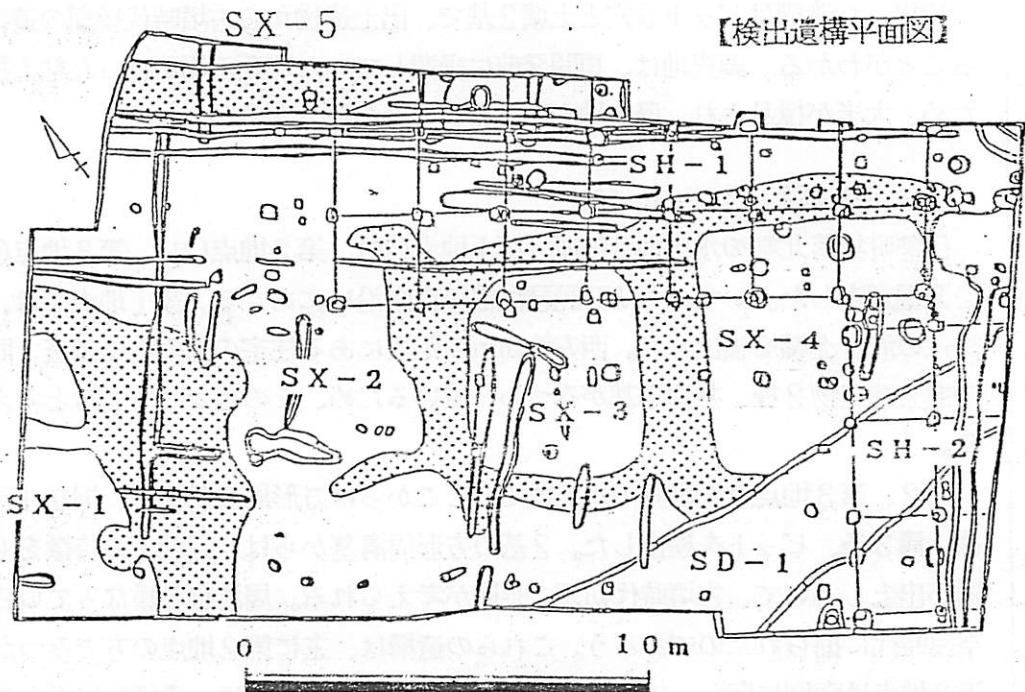
差は約2mにもなる。この結果、大きな低湿地あるいは河道があることがわかり、ムラは伊勢町集落側に営まれ、低湿地または河道を挟んで、その対岸に墓(方形周溝墓)が築かれたと推定できる。出土遺物から、第1地点で見つかった鎌倉時代の集落が営まれていた頃には、この旧河道はすでになくなっていたようだ。



つかのこし
塚之越遺跡 (23)

【第2地点・方形周溝墓出土土器】

古高工業団地の東側には塚之越遺跡が所在する。過去に1度発掘調査され、鎌倉時代の集落跡として周知されてきたが、今回は前回調査地の南側にあたる工業団地の道路向かいの水田を調査し、掘立柱建物2棟、方形周溝墓5基、溝を検出した。建物は鎌倉時代中期と考えられ、1棟が7間×2間以上、もう1棟が3間×1間以上の規模で、調査地の外側に広がる。2棟の建物はほぼ同じ方向を向き、併存した可能性もある。前回調査でも今回の建物と同じように、大規模な建物がみつかって



いるため、農民の住居か、あるいは寺院であろうか。

方形周溝墓は5基のうち4基が周溝を共有し、接続する。出土遺物から弥生時代後期に造られたと考えられる。東西方向に伸びる溝は奈良時代に掘られたようで、溝底より土師器、須恵器が出土する。

いままで考えられていた鎌倉時代の集落のほか、奈良時代、弥生時代の生活跡も存在する複合遺跡である。

横江遺跡 (24)

昭和58～62年にわたり実施された横江遺跡発掘調査(滋賀県教育委員会実施)では弥生時代から中世に及ぶ数々の成果を挙げた。とりわけ中世村落は明瞭な状態で、しかも面的な広がり兼ね持ったもので、極めて貴重な資料である。

今回調査したのはその調査地の東側に広がる水田地で、幅約5m、長さ約300mの範囲である。前回調査に関連する遺構はみつからなかったが、調査地西辺、つまり前回調査地の東隣から弥生土器、土師器、須恵器を包含する大規模な旧河道がみつかった。旧河道以東は粘土や砂が不安定な状態で堆積していた。

前回調査地より東側一帯は、当時の野洲川主流であった境川の支流と低湿地帯が広がっていたのではないだろうか。

二町鏡遺跡 (25)

二町町の西側、約25000m²の範囲の試掘で発見されたこの遺跡は、縄文時代以降の集落跡として認識され、中心は弥生時代中期、平安時代末期である。弥生時代の遺構は方形周溝墓の集合した墓地であり、その数や造築の仕方に中期の特徴をもち、3～5基が連結して小群をつくる形であった。平安時代は集落の一部であり、母屋と副屋、井戸がセットでみつき、しかもその周辺には畑地が広がるという当時の農村の明らかにした上で貴重な発見であった。なお、江戸時代以降と考えられる井戸が2基以上もあり、それらが周辺に家をもたないことから、田畑に灌漑する用水のための井戸であったと考えられ、田用水の確保が困難な時期に井戸水を汲み上げたものと思われる。

川田遺跡 (26)

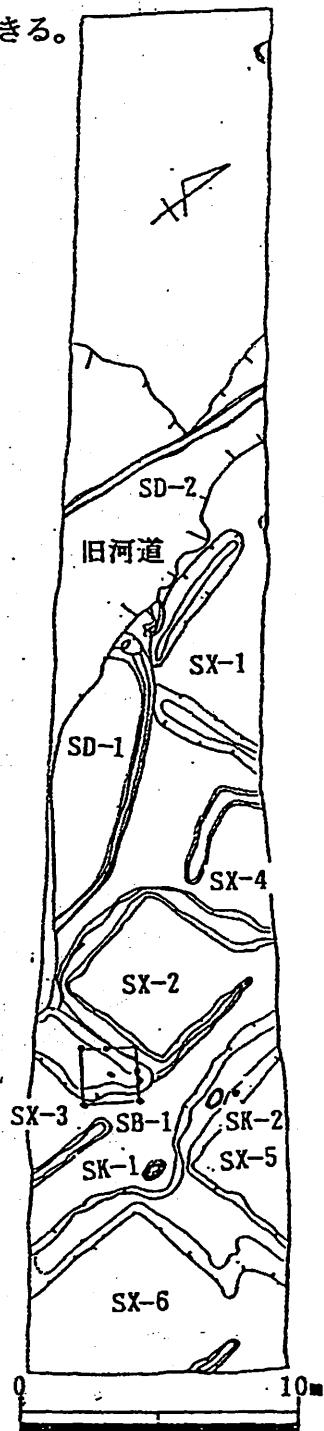
一昨年に県内最小級の前方後方墳が発見されたり、平安時代末～鎌倉時代の集落、近世の区画溝など長期にわたる遺構が検出されているが、本年も平安時代末～鎌倉時代の建物跡がみついている。調査地点の差から平安時代の建物は60m以上離れており、当時のムラの中は、数十m離れて家が建つという比較的広い屋敷をもつ家が散在していたと思われる。また、それらを囲うような溝も大きくなく、屋敷の意

識が低いと言えよう。なお、この上層には大正時代の砂だまりあり、耕地整理の痕跡をのこして、近代の土地利用の変遷もみることができる。

ま と め

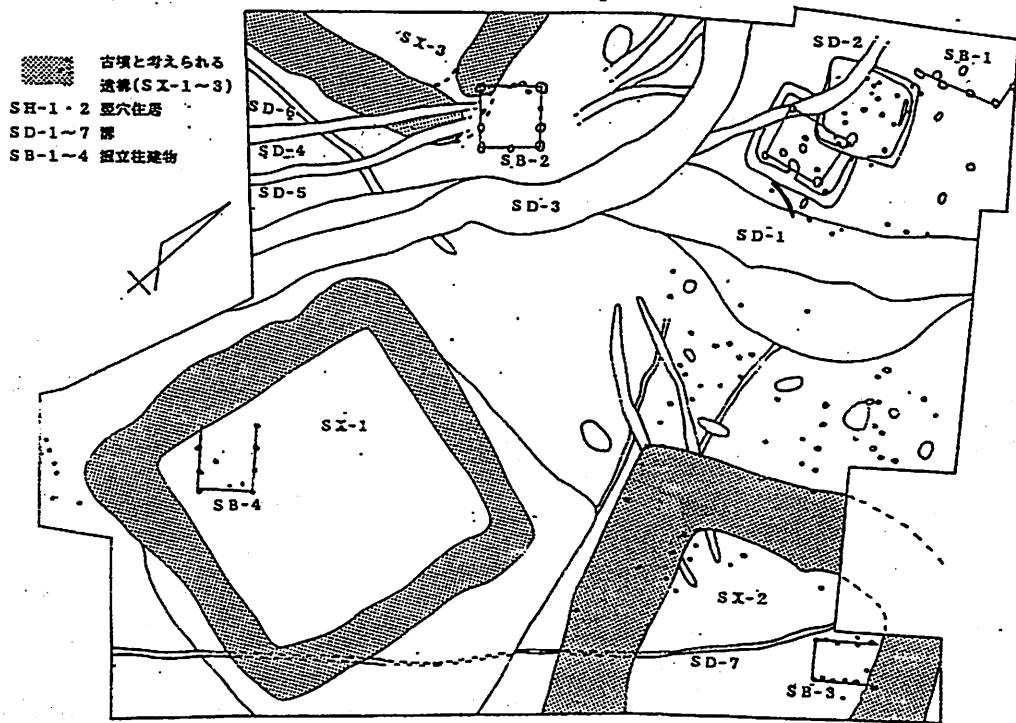
63年度は数多くの新しい成果を得ることができた。それらを1つずつ説明する紙面がないので、要約して、まとめにしておきたい。

まず、縄文時代の遺物を出土する遺跡が増え、新たに二町鏡、荒牧、経田の3遺跡を加えることになった。そのなかでも経田遺跡では内陸部では見ることのなかった中期の隆帯文で飾った深鉢や石斧、石鏃、石錘など集落的要素が強く、確実にムラをとらえることができる。荒牧遺跡でも遺物が土壌状の落ち込みから出土していて、何らかの住居区存在を予想できる。弥生時代では横枕遺跡で、二ノ畦遺跡と関連して400mを越える範囲を圍繞する環濠を検出したことに注目したい。また、その中で検出された住居も方形や円形が混在することも特徴であり、他遺跡と比較できる内容である。墓域の検出された金森東、塚之越、吉身西遺跡では、その種類はやはり方形周溝墓であり、二町鏡遺跡でもその検出があった。吉身西、二町鏡、金森東遺跡は弥生時代中期に属しており、連結状態の小群をつくり、全体としてはその小群を2~3あるいは5、6をもって成立したものと考えることができ、居住空間から数百m離れた土地に築かれたものである。なお、横枕遺跡で検出された例から一集落一群の墓域ではなく、一集落が幾つかの墓域をもつものと考えたほうが妥当性をもつものと思われ、吉身西、金森東遺跡は一集落の墓域となる可能性がある。後期の方形周溝墓は市内で初例であり、やはり数基が連結し、数群をなしているものと思われる。また、周溝墓間に格差が大きくなっている可能性が高い。今後の調査例の増加を待って明らかにしてゆきたい。古墳時代の調査例は金森東遺跡で住居、経田、吉身西遺跡で住居と墓域、益須寺遺跡で住居と墓、伊勢で墓が調査された。金森東遺跡で



凡 例
 SX-1~6 方形周溝墓
 SK-1・2 埋葬施設
 SD-1・2 溝
 SB-1 建物
 【金森東遺跡遺構平面図】

は弥生時代後期の五角形住居とならんで、庄内～布留期の方形住居が、弥生時代後期から引き続く2～3の単位集団が古墳時代後期までつづく珍しい集落である。下長遺跡では集落の中心から離れた位置で土壌を検出しているが、祭祀か墓かを決定する必要があり、近隣に古墳が営まれていることから性格の判断が急務である。図書館敷地（吉身西遺跡）では6世紀後半以降の掘立柱建物と円墳の残骸2基が明らかになり、庭家遺跡周辺にプレ群集墳の存在したことが明らかになった他、建物についても大規模なものが多く、掘立柱建物の性格の究明が待たれる。経田遺跡の3基の方墳も低墳丘墓と考えられ、プレ群集墳が各地に形成されていたことを推定させる。益須寺遺跡の前方後方型周溝墓（本文では前方後方墳）は周溝の掘り方が古墳よりも周溝墓に近く、形、出土土器を含めて、近江最古と認識すべきと考えられる。伊勢の方形周溝墓も以前に検出されていた周溝墓の対岸（低湿地あるいは旧河



【経田遺跡検出遺跡平面図】

道を挟んで) にあり、供献と考えられる土器が北陸地方の影響を強く受けていることから、その被葬者が在地の人々から区別されて葬られたと考えるべきであろう。また、益須寺遺跡の住居は6～7世紀に至るもので、益須寺造立以前の集団を知ることができたうえで、貴重であり、出土した瓦から近くに建てられた寺院関連の建物を究明する課題を提供したと言えよう。

中世では二町鏡、川田、塚之越遺跡があげられる。二町鏡、川田遺跡とも発見さ

れた建物が相互に数十mの距離を置いていることから、14世紀代の横江遺跡の区画集落に先行する、やや古いムラには未だ屋敷の区画が意識されなかったことを予想させると共に、長塚遺跡などとともに散村集落の可能性が高い。塚之越遺跡は何と言っても輸入陶磁器の多いことが注目され、また大規模な建物にも興味もたれ、交通の主要ルートの中にある遺跡として認識し、性格についても寺院や中核的集落の可能性を考えておくべきであろう。

以上、課題を持ち越すものもおおいが、より古い遺跡の発見とその増加、地上から消え去った古墳群の発見と最古の前方後方墳など、近江における守山も急速に重要な位置を占めるようになり、弥生時代の大環濠集落の成立も、それ以降に展開する野洲川左岸の重要性を示唆しているわけで、今後も、この重要性を更に認める調査が増えるものと思われる。

||||| 刊行図書のお知らせ |||||

毎年、多くの埋蔵文化財発掘調査を実施し、守山の歴史が次第に明らかになってきてます。この守山の歴史を学ぶための、また文化財を理解するための参考になるよう、個々の発掘調査の成果を調査報告書にまとめ、刊行しています。近く刊行する報告書を含め、下記の調査報告書があります。詳しくは当センターにお問い合わせ下さい。

「川田の歴史」

既刊

古墳時代後期の古墳群（前方後円墳、円墳）、木棺墓、平安時代～鎌倉時代の集落跡、まぼろしの村「合村」跡の調査概要。

「昭和61・62年度市内遺跡群発掘調査報告書」

既刊

市内各所の遺跡調査報告書。杉江遺跡、大門遺跡の中世集落や下之郷遺跡の弥生時代の環濠集落の調査他。

「吉身西遺跡発掘調査報告書」

既刊

県立成人病センター東側の弥生時代中期～平安時代の集落跡の調査。弥生時代中期の方形周溝墓27基、古墳時代前期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸などを検出。

「二ノ畦遺跡発掘調査報告書」

近刊

守山市、野洲町にまたがる弥生時代中期の環濠集落の調査。環濠1条と竪穴住居9棟を検出。

「益須寺遺跡発掘調査報告書」

近刊

古墳時代初頭の竪穴住居1棟、奈良時代～平安時代の掘立柱建物群、井戸跡を検出。

「古高遺跡発掘調査報告書」

近刊

南中学校西側の古墳時代～鎌倉時代の集落跡の調査。6世紀の玉づくり遺跡。条里溝、掘立柱建物を検出。

「横枕遺跡発掘調査報告書」

近刊

弥生時代中期末の環濠集落の調査。環濠1条、方形周溝墓、竪穴住居を検出。



埋蔵文化財センター開催事業

当センターでは、昭和63年4月から平成元年3月までの1年間、文化財の普及啓発を目的として、下表の事業を行いました。

年・月	開催事業の概要
昭和63年 4月	☆春季特別展「昭和62年度調査速報展」 ◎「乙貞」発行 開催期間 4月29日(祝)～5月8日(日)
5月	主な行事 5月3日 講演会「水辺の遺跡」 岡本武憲氏 " スライド会「昭和62年度調査成果」
6月	
7月	○センター友の会総会 7月30日 ◎「乙貞」発行 文化財講座 講演会「中山道と一里塚」 川端 弘氏
8月	☆夏季特別展「稲作の始まった頃」 開催期間 8月7日(日)～21日(日)
9月	☆「郷土の歴史研修講座」 8月19日 講師 古川与志継氏 ☆益須寺遺跡現地説明会 9月17日 ◎「乙貞」発行 ○センター友の会「日本列島発掘展」見学 9月17日 ※「日本列島発掘展」に出展(9月15日～20日)
10月	○センター友の会県外見学 福井県一乗谷遺跡 10月22日
11月	☆秋季特別展「古墳と埴輪」 ◎「乙貞」発行 開催期間 11月3日(祝)～27日(日) 主な行事 11月13日 講演会「古墳とまつり」 西藤清秀氏 期間中 体験学習「古代の火おこしに挑戦」 ○センター友の会見学 野洲町立歴史民俗資料館 11月26日
12月	
平成元年 1月	◎「乙貞」発行
2月	○センター友の会研修 2月25日 スライド会「昭和63年度発掘調査の成果報告」
3月	○センター友の会総会 3月25日 ◎「乙貞」発行 文化財講座 講演会「仮称 笠原南遺跡」 木戸雅寿氏

スライド会を開催 !!

去る2月25日(土)にセンター友の会の2月の活動として、スライド会を開催しました。テーマは「昭和63年度発掘調査の成果報告」で、昨年4月から今年2月現在までの期間、実施した調査の成果をスライドを使い学習しました。

写し出されたスライドには、調査員の説明を付け加えられ、約2時間の間に12ヶ所の調査が、約70枚のスライドを使って報告されました。現地説明会とちがい、室内に居ながら幾つかの「発見」を知ることができ、満足そうに見入っていました。

友の会会員募集のお知らせ

埋蔵文化財センター友の会は、歴史、特に埋蔵文化財に興味をもつ人々の集まりです。現在22名の会員は、年間6回程度の県内外へ見学や講演会によって、興味を深めています。友の会では、平成元年度の会員を下記の要項で募集します。原始、古代に興味をもたれている方の入会をお待ちしています。

記

- 1 入会資格 中学生以上の市内在住者または在勤者
- 2 会 費 年間 1000円 (通信費、ただし県内外への見学にかかる経費は実費負担)
- 3 申し込み先 守山市立埋蔵文化財センター (☎ 0775 85 4397)

埋蔵文化財センター春季特別展開催のお知らせ

センターでは、春季特別展を下記のとおり開催いたします。今回は、本紙でもお伝えしているように、昭和63年度に実施した発掘調査によって、また新たに多くの歴史的事実が分かりました。最新の調査成果をまとめあげ、展示いたします。是非、ご覧下さい。

記

- 1 開催テーマ 「昭和63年度発掘調査速報展」
- 2 開催期間 平成元年5月17日(水)～22日(月)

※開館時間 9:00～16:00、開催期間中は休館いたしません。

【後記】 佐賀県・吉野ヶ里遺跡で実施されている弥生時代の環濠集落の調査が今、注目されています。環濠集落とは、まわりに濠を巡らせた集落で、弥生時代の中期に盛行します。濠は集落の回りを延々と掘込まれていて、莫大な労力がつき込まれたことが想像できます。濠は、「倭国大乱」と結びつけ、外敵から集落を守るための施設という説が有力です。この環濠集落は、市内では服部、二ノ畦、下之郷遺跡で見つかっています。いつか吉野ヶ里遺跡のような大発見があるかもしれません。